

おかしいまちがい

小川未明

青空文庫

ある田舎いなかに、一人の男ひとりおとこがありました。その男は、貧乏びんぼうな暮くしをしていました。

「ほんとうに、つまらない、なにひとつおもしろいことはなし、
毎まいにち日ひおなじようなことをして、日ひを送おくっているのだが、それ
も飽あきてしまった。」

男おとこは、そう思おもいました。そして、あう人ひとに向むかって愚痴ぐちをもら
しました。

これを聞きいた人々ひとびとの中なかには、

「これは、おまえさんばかりがそうなのではない、みんながそう
なので、しかし、いったからとてしかたがないから黙だまってい

るのですよ。」といったものもあります。

しかし、男は、それを聞いただけでは、あきらめられませんでした。もつと、おもしろいことや、しあわせのことがなかつたら、生きていくかいはないように考えました。

男は、お膳に向かつて飯を食べますときに、

「いつも、こんなまずいものばかり食っているのでは、生まれてきたかいない。」と思いました。

また、仰向いて、家の内をじろじろと見まわしては、
「いつも、こんな汚らしい、狭い家に住んでいるようでは、生ま

れてきたかいない。」と思いました。

そして、男は、人の顔を見ると不平をもらしました。なかには、

「あなたのおっしやるとおりですよ、人間にんげんはいつまでも生きて
 いられるものではありませんから、せめて生きていいる間うちだけでも、
 おもしろいめや、好きすなことをしなくては、生きていいるかいはあ
 りません。世間せけんには、そうしたりっぱな暮くらしをしているものも
 あるのですから……。」と答こたえたものもあつたのです。

男おとこは、仕事しごとをするのも、なんだかばからしくなつて、ぼんやり
 として日ひを送おくつていきますと、そのうちに秋あきとなり、冬ふゆとなりまし
 た。冬ふゆになると、雪ゆきが降ふつてきて、田たも圃はたもまた家いえも、雪ゆきの中なかに
 埋うもれてしまつたのです。小鳥こどりは、毎まい日にちのように枯かれた林はやしにき
 ては、いい声こえでさえずつていました。

「あんなに、あちらは雲くもぎ切れがしていますよ。あつちへいったら、

きつとおもしろいことがあるでしょう。」

こんなふうには、小鳥ことりはいつているように聞きこえました。するとある日ひのこと、男おとこは、また人ひとにあつて、

「ほんとうに、毎日まいにち、おもしろくなくてしようがありません。もつと暮くらしのいいところはないものでしょうか。」といいました。

すると、その人ひとは、男おとこに向むかつて、

「おまえさん、旅たびへゆきなさると、金かねがもうかるそうですよ。いま、あちらは景けい氣きがいいといいますから、きつと暮くらし向むきも、いいにちがいありません。」と答こたえました。

「旅たびといますと、どこですか？」と、男おとこはうれしそうに、どき

どきする胸を押さえてたずねました。

この人は、雲切れのした、あちらの空を指さして、

「あの国境の山を越しますと、もう雪はありません。いまごろは、暖かい花が咲いています。そこへゆけば、いつだって仕事のないことはありませんよ。」と答えました。

男は、雪がないと聞いただけでも、もはやじつとしていられますんでした。さつそく、その旅へ出かける用意をいたしました。

「俺は旅へゆこう。そして雪のない、いい国で働こう。金がもうかり、おもしろいことがたくさんあつて、いい暮らしができるだろう。そうすれば、俺は、もう一度この村に帰つて、みんな家も圃も売つて、後始末をつけて出直すつもりだ。そして、旅で一

生しょうを送おくることにしよう。」と、男おとこは考かんえました。

男おとこは、家うちを閉しめて、留る守すを隣となりのひとに頼たのんで旅たびへ出でかけたのであります。もとよりたくさんの旅り費よひを持もっているわけではありませぬ。やつと、あちらへ着つくだけの金かねしかなかつたのを懐ふところに入れて出でかけました。

男おとこは、ただ、雲くも切ぎれのした明あかるい空そらを望のぞんで、道みちを急いぎました。山やまに近ちかづくにつれて、雪ゆきはますます深ふかくなりました。しかし一いっの山やまをあちらにまわれれば、雪ゆきがなくなるのだ、そして、そこには、暖あたたかな風かぜが吹ふいて、花はなが咲さいている。そればかりでない、自分じぶんのかつて見たみたことのないような、美うつくしい、にぎやかな町まちがあるのだ。そこで自分じぶんは、いい暮くらしをすることができ。きつと、その町まち

の人は、遠くから出かけてきた自分をあわれんでくれるにちがいない。またしんせつにしてくれるにちがいない。ほんとうに、そうであつたら自分は、どんなにしあわせだろう？

男は、さまざまな空想にふけりました。そして幾日も幾日も旅をつづけました。男は、夜になるとさびしい宿屋に泊ま

りました。しかし、にぎやかな町や、たのしい生活のことを空想すると、男は、すこしもさびしいとは思いませんでした。

男がいなくなった後は、村は雪にうずもれて、その家は閉まつていました。そして、裏の木立には、いつもの小鳥がきて止まつて、男がいたときのようになさえずつていました。

男は、山を越えて、あちらの村へ入ってきました。もうそこは

雪ゆきが降ふらなかつたのです。けれど、花はなは咲さくどころでありませんでした。寒さむい風かぜが、林はやしや森もりの上うえに吹ふいていました。

故郷ふるさとにいる時分じぶん、明あかるい、なつかしい空そらの色いろは、その国くにに入はい

つては見みられませんでした。やはり、曇くもつたり、また晴はれたりす

ることがあつても、明あかるい、オレンジ色いろのなつかしい空そらを毎まい日にち

見みているわけにはゆかなかつたのです。男おとこはにぎやかな町まちを探さがし

て歩あるきました。すると、やや大おおきな繁華はんかな町まちがあつたのです。

「どれ、この町まちに、いい仕事しごとの口くちがあるか、聞きいてみよう。」と、

男おとこは、その町まちの人ひとたちにたずねました。

町まちの人ひと々は、この男おとこのようすをつくづくとながめましたが、

「おまえさんは、この国くにのものでないようだが、どこからこられ

ましたか。」とたずねました。

「わたしは山のあちらの国からやってまいりました。いま国のほうは雪が降っています。こちらへくれば仕事があつて、いいお金になるとききましたので出かせぎにやってまいりました。」と、男は答えました。

町の人は顔を見合せていました。

「それはうそですよ。こちらの不景気といつてはお話になりません。みんなは、あちらの山をながめて、あの山を越すと雪はあるというが、今年は豊作で暮らし向きがいいという。こちらにぼんやり遊んでいるより出かせぎにいったほうがましだといつて、せんだつてから、もう何人も出かけましたよ。」と、町の人は

と々は、あきれた顔つきをして話しました。

男は、途方に暮れはててしまいました。なお、そこここと口を探して歩きましたが、やはりいい口が見つかりませんでした。

「それは、一日も早くお国へお帰りなさいまし、まだ、お国のほうが、どんなに暮らし向きがいいかしれません。今年は、こちら是不作で困っています。」と、ある人は、男にいいました。

男は、持ってきた金をすっかり遣い果たしてしまいました。しかたなくまた、山を越えて自分の村へ帰ろうとしました。

雪は、だんだん深くなって寒く、そして腹は空いてきました。

宿屋はあつても泊まる金もなかつたのです。夜は寺の縁の下にガタガタと寒さに震えながら、寝たこともあります。そのとき、男

は、どんなに、いままで自分の家じぶんうちにいて気ままに暮くらしていたことをありがたおもいことだと思おもったでしょう。

それよりか、男おとこは、もう二日ふつかもなにも食たべずにいました。腹はらが空すいて、頭あたまがぼんやりとして、どこをどう歩あるいているやらわからずに、前まえへのめりそうなかっこうをして雪道ゆきみちをたどっていました。

そのとき、いままで、毎日まいにち、まずいものを食たべているのを不ふ平へいにおもおもったことが、まちがっていたのを気きづきました。

男おとこは泣なきたくなりました。またうらめしくなりました。家うちに帰かえったら、腹はらいっぱい飯めしを食たべようと考かんがえました。

やっと村むらへ帰かえると、いつか、旅たびへ出でかせぎにゆけば困こまるような

ことはないとおし教えてくれた人に出会いました。

「おまえさん、どこへいつておいでなすった。旅へゆかれたとう、うわさを聞きました。もう帰つてきなすったのか。」と、その人は怪しみながら、見る影もない男のようすを見守つて問いました。

男は、なにかいいたかつたが、疲れやら、腹がへっているやうで、なにも口がきけませんでした。ただ、その人の顔を見ると腹だたしくなつて、いきなり顔をたたきました。

その人は、びっくりして、飛びのきました。

「気が狂いなすつたのか？」

と、その人はわめきました。

おとこ
男は、またとぼとぼと、のめりそうに歩いてくると、隣のおば
あさんに出会いました。

「まあ、おまえさんは、どうして、そんなふうをして帰ってきな
すったか。ものもいえないのは腹がへっているからだろが、ま
あ、上がって、ご飯をおあがんなさい。」と、おばあさんは、し
んせつに男を自分の家に入れてお膳を出して、茶わんに飯を盛つ
てやりました。

おとこ
男は、じつと茶わんをにらんでいましたが、いきなり、その茶
わんを取って投げ捨てました。そして、おばあさんのかたわらに
あつたおひつを引つたくつて、頭からかぶりました。

おばあさんは、びっくりして、あわてて家の外へ飛び出しまし

た。

「だれかきてくれ！ 隣となりのひと人がき気がくる狂くるつた。」と叫さけびました。
 村むらの中なかはおお騒さわぎでおとした。そのとき、男おとこのいえ家の裏うらでは、木きに小こ
 鳥とりが止とまって、おかしそうにさえずっていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：雪森

2013年4月10日作成

2013年8月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

おかしいまちがい

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>